

編集後記

消化器外科学会雑誌37巻1号をお届けいたします。本号では原著論文5編、症例報告12編が掲載されております。いずれの論文も厳重な査読がなされ、筆者と何回もキャッチボールをし採用された論文です。現在、編集委員会では上部、下部、実質臓器の3分野がそれぞれ3グループずつ2人体制で構成されております。超専門的分野では元編集委員の先生にも加わって頂いております。毎月の編集会議で感じている点について私の感想を述べてみたいと思います。いずれの筆者も日常診療や教育の合間をぬって書き上げ投稿されたものであります。そしてその論文が自分達の業績となり、読者に訴えようとする意気込みは感じられます。編集委員としてはその論文を別の角度から、趣旨を読みとり、より良い論文の体裁にするにはどうするかに努力を惜しまず編集委員会で討議しております。この指摘に可能なかぎり対応してくれる著者がほとんどですが、残念なことに判読出来ない程の手書きの投げやりな修正文として戻ってくるものがあるのは事実です。時あたかも平成16年度から始まる研修医制度のマッチング結果が発表されたばかりであります。研修医の2年間のトレーニングも目まぐるしいものと予想されますが、より大変なのはこれらの研修医を指導する立場の医師であり、その立場にあたる人達の投稿論文でしょう。もう一度初心に戻り科学論文を書く姿勢をもつべきと危惧しているのは本誌編集委員全員の意見であると思われます。

本文を書いているとき、いま国際千葉駅伝がスタートしました。恒例となった行事であり、自宅近くを通過していくが沿道で応援したことはまだ一度もありません。選ばれたアスリート達はそれぞれ多くの試練を乗り越え克服したほんのわずかな一握り集団でしょう。偶々の幸運はありえないが良き指導者に巡り会うことは最低の必要条件なのでしょう。われわれの住む世界も同様と思います。まず走り出す習慣をつけ、自身では気づかない走行姿勢が悪ければ指摘してもらおう。そして徐々に身体に覚えこませた技術を駆使していくことでより良い結果を生み出す。本誌編集委員一同そのために月1回の会議に北海道や大阪から集まってくるのです。是非、学会などで発表した成果を本誌に投稿する習慣をつけて欲しい。その姿勢を直すことに編集委員は多忙な中でも努力は惜しまない覚悟であります。

(神津 照雄)